

ゴルフ友達として

佐々木 栄一郎

大平総理は激職中も健康保持のため休日にはできるだけゴルフをしておられたが、心ない一部の人から「庶民の苦しみも知らずゴルフばかりやって」などと悪口をいわれていたのは随分お気の毒なことであった。総理在職中、日本でゴルフをされたのは二十数回に過ぎず、その期間中の日曜祭日は百日ぐらいであるから、大平さんのプレーした日数はその三分の一にも満たないものであった。また、あるマスコミによると、その二十数回のうち私が十七回ほど一緒にプレーしているとのこと、いろいろ質問されることがあった。

ところで私は、戦時中、安孫子藤吉氏（現参議院議員）の紹介で初めてお会いした当時、大平さんは津島寿一大蔵大臣の秘書官だったが、坊主頭で半ズボンという格好で現われ、話も素直で実に飾らない人だなという印象を受けた。その後、大平さんといくどとなく会い、日本の将来などを話題としたが、大平さんは「日本が敗けることは何より残念だが、今の日本のように軍部独走でもし勝ったとしたら恐ろしい世の中になるだろう。そしてそのような日本は早い時期に倒れる日がくるのではないか」と当時としては思い切ったことを話していた。私は大平さんの素朴で物に動することなく、しかも知性豊かで長期の見通しのできる人柄に深く引きつけられた。

さて、大平さんのゴルフは、一言にしていえば、ゴルフアとしてのマナーやエチケットは最高であった。例えば、約束の時間は絶対守る。適当なペースでプレーする。パートナーがのろろして待たせても決していやな顔をしない。他人のプレーには極めて寛容だが、自分にはなかなか厳しい。ごまかしは一切やらない。スコアも

実に正確で、しかもパートナーのスコアもよく覚えていて、「ドライバーの次にアイアンで左にひっかけスリーオンのスリーパットじゃないの」などと教えてくれることがよくあった。

だがフォームとかスコアとかはそうはいかない。何しろズングリした体形から腰を一杯に回し思い切ったスウィングをするのだから、力量感はあるがスマートとはいえない。しかし何時でもどこでも必ずバックティーからプレーして、大体二百ヤードは飛ばした。しかも真直ぐな低目のよく延びるボールであった。百五十ヤードくらいからアイアン六番などでよせるのは実に上手だったが、パットはあまりうまくなかった。パットをはずすと「天は正義に味方しない」などと嘆き、パートナーが長いパットを入れると「友情にもとるじゃないの」といつて笑わせていた。ゲーム運びは上手で、また確実で、例えばバンカーとか障害物のある時などは一打損しても必ず横に出してプレーするやり方である。一か八かなどという無理はまずやらないし、ゴルフ歴四十年というだけあって、ここぞという時はよくまとめ、ピンチを切りぬけて大きく崩れるということは少なかった。しかしベツト（かけ）は縦横でなかなか厳しく、勝つとあの細い目がなくなるくらい大喜びで笑いが止まらない。反対に敗けた時は少年のようにしょんぼりすることもあった。

急逝後以前から心臓が悪いのを隠していたのではないかという話もあったが、長年ゴルフ友達として見る限り全くそれはない。一昨年七月箱根での三日間も、その一日は風速二十メートルくらいで大雨降り、その翌日も雨降りだったが、例によってバックティーから力一杯のプレーをしてスタスタと歩く。私の方がやめたいくらいだった。もし心臓が悪かったならとてもやれることではなかったと思う。衆参ダブル選挙は、自民党が大勝となった。しかし残念なことに、大平さんは素晴らしいチップインの結果を見ることもなく優勝のカップにも触れられず、バンカーの中で倒れたのであった。誠に劇的な幕切れであった。